

## 邪神の供物にされた爆乳姫騎士

レイザリア王国ベスラ地方。

この地方を治める領主カザーリナン・ナザロフが死んだのは、王国暦六八三年の五月のことであった。

カザーリナン・ナザロフは気さくな人柄で知られた人物で、生前はよく城の外に出ては領民と交流を持つことを好んだ。それは実施する政策に生かされた。庶民に対する税の軽減措置、役人の綱紀粛正、学校や病院の建設、及び人材の育成などに力が入れられ、「養老傷病者年金」なる制度が設けられたりした。これは老いや病気、怪我や障害など何らかの理由によって働けない者に対して金銭を支給する制度で「どんな人間も人間らしい生活を送る権利を有している」という考えによって設立されたものである。この制度の運営財源には、カザーリナンが所有する金鉱山と岩塩鉱山からの収益があてられた。まだ「人権」などという概念が存在しなかったこの時代、これは画期的な制度として後の世で評価されることになる。

カザーリナン・ナザロフはまた、質素儉約を美德とした人間で、私生活においても特に贅沢をしようとはせず、愛人も囲わず妻となった一人の女性を生涯愛し続けた。妻に先立たれてからも再婚しようとはせず、冥福を祈って肉や酒を断つ生活を送るようになったため、彼のことを「聖人」と呼ぶ者さえいた。

そのような経緯もあって、彼が死んだ時、領民たちは深く悲しみ、城には訪れた弔問人で地の果てまで列ができたほどであった。

カザーリナン・ナザロフの死後、跡を継いだのはひとり息子のゾルディアナ・ナザロフであった。彼は二六歳の若者で、長身で顔立

ちもよく、王都の大学で様々な知識や技術、学問を習得して（秀才）と言われた人物である。ただこの男には色々とはよくない噂がまことしやかに囁かれており、領民たちはゾルディアナの就任を不安に思いついながらも歓迎し、彼が亡父のように領地を治めてくれることを望んだ。

領民たちの不安をよそに、ゾルディアナの政治的手腕は極めて安定したものであった。彼は亡父の政策を全て継承し、継続すると同時に、カザーリナンが果たせなかったデレ川の治水対策工事もわずか一年で完了してしまった。領民たちはゾルディアナが敷く善政に安堵し、彼を「名君」と呼び讃えた。

最初の三年間は無難に時が流れ、領民たちは泰平を愉しんだ。しかし、その間にも、ゾルディアナに関する悪い噂が途切れることはなかった。噂話のなかでもっとも有名な話が、ゾルディアナは異界の邪悪な神と契約し、人間の命と引き換えに様々な知識や技術を習得しているというモノであった。領民たちはその話を聞くと頑なに否定し、「領主様は良い人だ」と言ったが、ゾルディアナが領主となつて以降、領地内では旅人や行商人がよく行方不明になっていたことを思い出し、背筋に寒気を覚えるのだった。

この頃、ゾルディアナは小間使いの従者に悪意の片鱗を語ったことがある。それは月がいやに赤い色をした夜のこと、ゾルディアナはその時、彼がいままで一度も見せたことがない邪悪な笑みを浮かべて告げたのだ。

「この世には、この世界とは異なる世界が存在している。この世界とは何もかもが異なる（神）が住まい支配する世界がだ。その世界の知識や技術を手に入れるためには人間の血と肉、そして悲鳴が必要だ。それもできるだけたくさん量。そしてその究極ともいえ

る〈神〉の一部を手に入れるためには、同じ量の「供物」となる肉が必要だ。向こうの世界に送っても、どんな悲惨な目に遭っても耐え切れる肉体と精神を持った生きた〈肉〉が、だ。難しい……：極めて難しい。至難であり、苦難であり、そして困難である。しかし、向こう側の世界の知識と技術、そして〈神〉の一部を手に入れることができたならば、私はきつと、この世界の〈神〉に成ることができのだろうな」

そう言つてゾルディアナは「くくくくく」と邪惡に笑つた。

小間使いの従者は恐ろしさのあまり震えあがつたが、彼はこのことを誰にも喋らなかつた。それは彼が口が固かつたわけではない。彼が幼少期の事故によって、声帯と視力のほとんどを失っていたからである。

ゾルディアナの統治はその後も滞りなく続いた。

異変が生じたのは四年目である。当時、レイザリア王国は、隣国のアビスベルド公国と交戦状態にあつた。アビスベルド公国は強国で、特に精銳と名高い「黒羊撃滅騎士団」の猛勇ぶりはレイザリア王国を震撼させた。

ゾルディアナは王国より、兵を率いての出兵を求められていたが、様々な理由をつけてこれを断っていた。その代わり、資金や糧食を惜しみなく提供し、さらに城を開放してアビスベルド人捕虜の面倒を引き受けた。最初の月は五〇人、次の月は一〇〇人、その次の月は二〇〇人と言つた具合に、戦争の激化と共に受け入れる捕虜の人数はどんどん増えていった。しかし、不思議なことに、どんなに捕虜を引き受けても、城は人で溢れかえることなく、ざわめきも騒音もなく静寂さが保たれていた。領民たちは不気味に思ったが、自分たちに何か害があるわけではなかつたし、何よりも領主のことを

信じて（そう思い込むようにして）いたから、悪い方向に考えないようにしていた。

悪意の一旦が明るみに出たのは王国暦六八七年七月の嵐の夜であった。城に捕虜として捕らわれていたアビスベルド人が逃げ出し、近くの村に逃げ込むという事件があったのだ。アビスベルド人捕虜は転がり込むようにして一軒の民家に逃げ込むと、驚く家人に対して、必死の形相で両手を合わせ、拝むようにして片言のレイザリア語で訴えたのである。

「恐イ、恐イ、助ケテ、匿ツテ、殺サレル、化ケ物ニ――」

だがその時、逃げた捕虜を追って城兵がやってきて、アビスベルド人捕虜は取り押さえられてしまった。アビスベルド人捕虜は発狂したように泣き叫び、助けを求めながらもがいて逃げ出そうとしたが、身体を縄で縛られて引きずられるようにして連れて行かれた。

この一件は「不名誉な不始末」ということで緘口令が敷かれたが、人の口に戸が立てられるわけがなく、噂はすぐに広がり、領主は城で何か恐ろしいことをしているのではないか、とまことしやかに囁かれるようになった。それでも、城には相も変わらずアビスベルド人捕虜が連れて来られ、そして二度と出てくることがなかった。

事態が急転したのは王国暦六八八年一月のことである。長く続いたアビスベルド公国との戦争が終わり、和平が結ばれたのだ。それに伴って捕虜返還協定が締結され、その報せはベスラ地方にもたらされた。

ゾルディアナの元には王都から戦時中に送った二五〇〇人の捕虜を解放するよう命令書が届いたが、それに対するゾルディアナの返答は驚くべきものであった。

「二五〇〇人の捕虜は全員死亡。死因は城内で発生した疫病のため」

その証拠として、ゾルディアナは王都に対し、なんと二五〇〇個の頭蓋骨を送り届けたのである。王国側が驚いたのはいうまでもない。と同時に、深刻な懸念と疑念を抱かずにはいらなかった。なぜならば、ゾルディアナの悪い噂はすでに王都まで届いていたからである。

国王のモンテカロライナ二世は、自分の娘で武将のリディアを呼び、命令を下した。

「リディアよ、そなたに命じる。三〇〇の兵を率いてベスラ地方へ赴き、ゾルディアナ・ナザロフを即刻逮捕せよ。そして事態の究明にあたるのじゃ！　どんな方法を用いても構わん。ゾルディアナを拷問にかけてもよい。とにかく、真相を解明せよ！」

命令を受け、リディアは水準よりも遥かに大きな胸を張った。

「わかりました、父上——いえ、陛下。このリディア、必ずやご期待に応え、事態を見事解明いたしてみせます！」

「頼んだぞ、我が娘よ」

「はッ！」

かくしてリディアは三〇〇の精兵を率いてベスラ地方へと赴くことになったわけだが、それが彼女にとって本当の意味で地獄に足を踏み入れることになるうとは、この時はまだ知る由もないことであった。

続きは本編でお愉しみください。